

ま え が き

本書は平成5年度の調査研究事業「援助が途上国に及ぼす社会的影響」研究会（主査・佐藤寛）の成果報告書である。

本書は援助批判、ODA 批判の書ではない。また援助批判に対する反批判、あるいはODA 擁護のための書でもない。われわれは援助を「すでに存在している一つの現象」としてとらえることにする。これは本研究会発足時の約束である。

もちろんわれわれは、現在の援助・ODA をめぐる議論に無関心であるわけではない。研究会のメンバーのなかには、援助実施機関に直接・間接にかかわっている者もいるし、NGO 活動に携わっている者もあり、各自それぞれの意見をもっている。しかし、いずれか一方の論陣に加わって意見を表明する前に、われわれは現在のODA 論議、援助に関するさまざまな意見の交錯のなかで、議論の深化のための材料を提供したいと思っている。

今や世界一のODA 大国である日本で、援助をめぐる議論が活発に行われるのは当然である。それもさまざまな立場の人がさまざまな意見を言うことが望ましい。しかし、議論は建設的であったほうがよい。批判と反批判の間に議論の接点がなかなか見い出せないというのが、残念ながら現在のわが国の援助論議の現状である。

わが国の現在の援助論議のなかでは円借款をはじめとする大規模な経済開発プロジェクトに付随する諸問題が多くに関心を集めている。しかし技術協力の現場やNGO の現場で起きている出来事については、これまであまり正面から取り上げられてこなかった。しかしこれらの小規模プロジェクトは、

そこに投入される資金の額こそダムや道路建設のプロジェクトに比べてはるかに小さいとしても、社会に与えるインパクトという点では決して小さな問題ではない。むしろ「援助」という現象をめぐる援助供与側、援助受入れ側の人々の思惑が正面からぶつかるという意味で本質的な重要性をもっているといってもよい。そうであれば、こうした援助プロジェクトの現場で生起する出来事を対象とする研究があつてよいはずである。

本研究会のメンバーの大半はなんらかの形で日本の技術協力（青年海外協力隊活動を含めて）の現場およびその周辺での活動経験をもっており、現場での悩みをそれぞれ経験してきた。それゆえわれわれは現場から見た援助の問題点のある程度整理した形で提供できると考えている。同時にこうした経験をもとにして、「開発の社会的側面」の研究というより大きな問題にまで視野を広げていきたいというのが、この研究会の究極的な意図である。

このような立場の援助研究はこれまで日本ではあまり例がないし、われわれの意図はまだまだ十分に果たされてはいない。しかしながらこうした研究が、多くの意見が述べられながらともすれば互いにすれ違いがちなわが国の援助をめぐる論議に、新たな視野をつけ加えることができるのではないかと期待している。

本書はこうした試みの最初の一步である。多くの読者の忌憚のないご意見、ご批判を賜りたい。

1994年3月

主 査